

はじめに

牛島 和夫

(九州産業大学・情報科学部長)



1. 創刊のごあいさつ

九州産業大学情報科学会誌の創刊号をお届けします。九州産業大学情報科学会は情報科学部の専任教員を特別会員として、学部学生を普通会员として構成されています。情報科学会の設立目的は、情報科学および関連分野の研究・発表です。それを実現するための手段として、情報科学会誌の発行と研究会や講演会の開催とを主な事業を挙げています。情報科学会は、情報科学部における教育・研究の状況を発信する媒体の一つです。

情報科学部では学生全員にノートパソコンを貸与していますから、情報科学部のWEBページを使って情報の発信や受信ができるのではないかと、わざわざ冊子体の会誌を発行しなくてもいいのではないかと、という議論もありました。しかし、WEBページというのは見に行くと初めてそこから発信されている情報を受け取ることができる媒体です。WEBページの情報には書き換えられないままになっている例もしばしば見かけます。大勢の目にさらされているWEBページは常に更新され続けていますから、逆に区切りがありません。WEBページというのはそういう機能をもった媒体です。何年か後になって振り返ってみたときに、会誌の発行を区切りとして情報科学部の活動が見えるのも記録の一つの役割です。

情報科学会誌を手にとった部外の方が情報科学部の存在に気がついて、改めて情報科学部のホームページにアクセスして頂ければ、情報科学部からの情報発信を受けて下さる方が得られたこととなります。情報科学会誌は、これから年に1回発行されることになるでしょう。毎年発行を続けて、10年たった後で10冊の会誌を手にとってみたときにその積み重ねの中から、さらに歩み続けるエネルギーを汲み取ることができることを願うものです。

情報科学部では、大きな教育目標を二つ掲げています。

- (1) 情報科学・情報技術の基礎を確実に身につけ、高い倫理観をもった職業人として社会に貢献する人材の育成
 - (2) 社会の仕組みや人間の特質を知って情報技術を適切に適用できる能力をもった人材の育成
- 情報科学会誌は、これらの目標が達成できたかどうかを後になって検証する媒体の一つとして機能することにもなることでしょう。

2. 講義記録システムの導入経緯

情報科学部の開設に当たって、新しい試みの一つとして、講義記録システムを導入しました。この場を借りて決定の経緯を記しておきます。

ビデオカメラとマイクを情報科学部棟の全教室に設置して、そこで行われる講義を記録して WEB 配信する計画を、学部全体で組織的に実現したのは全国的に見て最初のものだと思います。限られた教室で一部の教員のみ実施しているという例はあります。私が 2 年前まで勤務していた大学で大学院の私の講義では教室に家庭用ビデオカメラを持ち込んで講義の有様や受講生による発表をすべて記録して講義参加者の範囲で視聴していました。この効果を確認していたので、学部開設 1 年前 (2001 年) の 5 月に情報科学部に就任予定の教員が打ち合わせのために集まった際に、すべての講義のビデオ撮影を私から提案しました。急な提案だったにもかかわらず、松本正雄先生と松永勝也先生から支持表明があって、設置することだけは決まりました。しかし、具体的にどんな仕様のものを実現すればよいか必ずしも明確になっていたわけではありません。ビデオ撮影のために人手を要するようでは実現不可能になります。収録した講義がたやすく視聴できることも必要です。建物内のネットワークの帯域や動画像を蓄積する記憶装置の容量など、これを実現するために克服しなければならない問題がたくさんありました。

建物関係を管轄する管財部と下川俊彦先生、合志和晃先生の尽力で、現在の形がまとまり、学部開設に間に合ったのは感慨深いものがあります。現在の技術水準でひとまず使い物になるシステムが実現したのでほっとしました。個人的にビデオに記録して視聴するのと、組織として記録して視聴するのとでは意味が格段に違うことを実感しています。

実際にこのシステムを使った学生や教員から改善注文がでています。これらは、ネットワークの帯域や、HDD の容量や、圧縮技術の進歩によって解決できるものがかなりあります。小規模とはいえ生きた情報システムを実体験しながら成長させていくというのは教材としても教育的な意義があると思います。

授業中の学生諸君の反応も記録できればさらにおもしろいシステムが構築できるかもしれません。しかし、こうなると単なる講義記録システムというより教育活動記録評価システムへと多様性が数段増すので、システムを根本から考え直さなければなりません。このようなシステムの導入を学生諸君がどう考えるか聞いてみたいものです。